

奥沢水源地水道施設

19 世紀後半に小樽が急成長を遂げるにつれて、小樽の水供給の改善が深刻な問題になりました。19 世紀後半には 2,000 人ほどの漁村であった小樽が、約 9 万人の新興港町に成長しました。小樽港にやって来る船舶の数も、真水の需要を高めました。1907 年、奥沢ダム、奥沢浄水場、小樽南東部を走る勝納川の階段式溢流路で構成される奥沢水源地水道施設の建設が始まりました。

奥沢水源地水道施設の見学ツアーは実施されていませんが、奥沢ダム近くの橋の上に立って越流水が放水路の幅の広い石階段を急降下するのを見ることができます。各段が浅い滝つぼのような形をしており、水の勢いや濁りをコントロールする役割をしています。各段の縁には長い石と短い石が交互に組まれており、水の勢いを和らげ、水の流れを導く役割をし、すだれ効果を生み出しています。溢流路の石階段と壁はすべて手作業で組まれました。

小樽市は、土木技師で学者でもある中島鋭治教授（1858 年-1925 年）に奥沢ダムと奥沢浄水場の建設の指揮を委託しました。中島教授はアメリカとヨーロッパで衛生工学や給水設備工事について学び、その後、東京にある皇居の給水施設に取り組みました。奥沢ダムや溢流路の工事のほとんどは手作業で行われ、寒冷な気候や豪雪のため、完成までにおおよそ 7 年かかりました。